

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 歴史と記憶とオーラル・ヒストリー  |
| Sub Title        | History, memory, and oral history   |
| Author           | 有末, 賢(Arisue, Ken)<br>都倉, 武之(Tokura, Takeyuki)<br>蘭, 信三(Araragi, Shinzo)<br>大門, 正克(Okado, Masakatsu)<br>柳沢, 遊(Yanagisawa, Asobu)<br>小林, 多寿子(Kobayashi, Tazuko)<br>石田, 幸生(Ishida, Sachio)                          |
| Publisher        | 慶應義塾福沢研究センター  |
| Publication year | 2016  |
| Jtitle           | 近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.33, (2016. ), p.283- 334  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | シンポジウム講演録   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20160000-0283">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20160000-0283</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 歴史と記憶とオーラル・ヒストリー

本稿は、平成二十七年三月十九日に慶應義塾大学三田キャンパスで開催されたシンポジウム「歴史と記憶とオーラル・ヒストリー」（主催…慶應義塾福沢研究センター、日本オーラル・ヒストリー学会、三田社会学会）の講演録である。当日の司会は有末賢・慶應義塾大学法学部教授（当時）、本稿の構成は石田幸生が担当した。

### 一 『戦争と慶應義塾』をめぐるオーラル・ヒストリー

——記憶とモノを如何に繋ぐか——

都倉武之

慶應義塾福沢研究センターの都倉と申します。私からは「戦争と慶應義塾」をめぐるオーラル・ヒストリー——記憶とモノを如何に繋ぐか——というタイトルでお話ししたいと思います。<sup>(1)</sup>私の在籍する福沢研究センターでは慶應義塾の大学史の編纂を担い、今戦争期の調査をやっており、オーラル・ヒストリーも収集してい

るため、登壇させていただくことになった次第です。私自身は政治史の研究をしており、実証的な文献史学の人間であります。公文書館などで資料を発見し、それを論理的に構築し、歴史を記述するということがやりてきました。今回、福沢研究センターに在籍する立場から、戦争期をどう記録し、記述していくのかという模索を続ける中で、中間報告的なことをこの場でしたいと思います。

「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトという調査を始めるに至った私からの発端からお話しします。福沢研究センターは福沢の研究、そして慶應義塾の研究が、いわば日本の近代全体を考える基礎になるというコンセプトの研究所です。私は福沢研究を中心に近代史の研究をしてきた人間ですが、センターに籍を置いて以降、慶應義塾史の研究にも携わることになりました。私が慶應義塾に戻ってきたのは、二〇〇八年の慶應義塾創立百五十年の前年というタイミングで、その歴史編纂という役割も多分に意識する必要に迫られました。福沢研究センターでありますから、福沢諭吉の研究があくまで中心にあるのですが、他大学と比較して帯で大学の歴史を記述するという観点から見るとき、慶應義塾では福沢時代に偏り、それ以降の時代はほとんど付け足しやおまけであるように思われているという点でムラを感じました。福沢の研究をするに当たり、教育者としての福沢、啓蒙思想家としての福沢を考えるとき、その思想を福沢自身がどのように残そうとし、それがどのように解釈されてその後引き継がれたかという点も、教育機関としての慶應義塾や近代の教育を考える上で非常に重要ではないかと私は考えました。

特にそれを考えるきっかけになったのは、二〇一一年に福沢研究センター主催で行なわれた松沢弘陽先生の講演「『福翁自伝』校注をめぐって」です。『福翁自伝』というあの有名な福沢の自伝は、口述筆記によって書かれたもので、オーラル・ヒストリー的な要素も含むとも考えられます。この本は非常に意図を持って書か

れ、構築されていると松沢先生によって指摘されました。「福沢にとって『死』の問題は重要である。後世への期待が、一種の遺言としての『福翁自伝』の背景にあったと考える<sup>(2)</sup>」。福沢没後、その思想がどう語り継がれるのか、福沢にとっても非常に大きな関心が持たれていたのです。そのことは研究の対象として重要だと思いました。

もう一つ、福沢研究センターに来てから気になっていたのは、戦争期の慶應義塾を考えるとときに欠かすことができない塾長小泉信三という人物についての「語りにくさ」の問題であります。大変有名な塾長としてOBの中では語り継がれている名前ですが、その人物をどのように評価するかは多様な見方があり、非常に語りにくいという現状があります。その相半ばする評価を痛烈に実感したのは、二〇〇八年に開催した展覧会「生誕百二十年記念小泉信三展」のときです。その企画では中心的に動く機会がありました。その際、小泉信三の事績をどのように展示に盛り込むか、記述の仕方によって来場者がどう反応するかといった点で大変悩みました。実際に展覧会が始まってみると、天皇皇后行幸啓ということもあり、やはり来場者から様々な反応がありました。中でも特に印象的だったのは、ある先生から「こんな展示ができる時代になったか」としみじみとではなく、非常にトゲのある形で直接言われたことです。そういう声の方が、戦争と小泉塾長の時代を直接体験した方ではなく、その時代を経験した先生方から教えを受けた戦後世代の方の中に多くいらっしゃることを実感しました。

そんな中、「慶應義塾と戦争」に取り組むには時間切れが迫っているのではないかとという状況で、二〇一三年八月から「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトを立ち上げました<sup>(3)</sup>。プロジェクトの直接のきっかけとなったのは、慶應出身の特攻戦死者の遺族から大口の寄付があったことです。これを元手として、できるだけ

けの資料収集を行うことを前面に出したプロジェクトにしました。なぜそういう形で歩き出したかといいますと、慶應義塾としてこの調査を行うことになったとき、戦争をどう評価し、戦争期の慶應義塾をどう評価してプロジェクトを始めるのか、評価の問題がありました。そこで、どのような見方をしている方からも、まずは協力を得たいと考えました。多様な資料と多様な聞き取りの内容を踏まえた上で、百五十年史の中に慶應義塾の戦争の時代を組み込んでいくためにも、まずはアーカイブをつくる意図でプロジェクトは動き始めました。

プロジェクトの内容として一番目に挙げているのは、まずはとにかくモノ、一次資料を収集する、あるいは所在を確認するという作業で、それを徹底的に行っておりま。展示の機会を度々設けてOBの方を中心に関心のある方に見てもらい、そしてまた資料を集めるという形で輪を広げる試みをしています。<sup>(4)</sup> 小泉展の時も、その後の福沢諭吉の展覧会でも、戦争期の実物資料が慶應に全然残っていないことに直面しました。この経験も、資料収集を打ち出すきっかけとなりました。

それから二番目として聞き取りがあります。私はそれまでにオーラル・ヒストリーなどの経験があったわけではございませんが、やるとなったならばやはり最後のタイミングであり、できるだけ多様なサンプルを収集することが肝要であろうと思いました。この「慶應義塾と戦争」というテーマの研究を考えてみますと、一九九〇年代に経済学部の白井厚先生が、ゼミの学生たちとの共同研究という形で先駆的な研究を残されています。『太平洋戦争と慶應義塾』<sup>(5)</sup>、『アジア太平洋戦争における慶應義塾関係戦没者名簿』<sup>(6)</sup>の編纂などをなされました。そこには膨大な蓄積があるわけですが、実物資料は残っていません。また証言集『証言 太平洋戦争下の慶應義塾』を出されたわけですが、そこに収録されているのは塾長経験者で戦争体験がある石川忠雄先生、

その他の教職員となった方、当時の教職員の方、あるいは戦争体験をされた方の中でも比較的特異な体験をした方、投降したとか、その後に学徒出陣世代のまとめ役となった方など、比較的特色のある方の証言です。<sup>(7)</sup>一方、劇的では無い、普通の体験を含め、できるだけ広範にいろいろな体験をまとめていく必要があるのではないかと考えています。

プロジェクト内容の三番目は、学内の学籍簿などの資料を統計データとしてまとめることです。学内資料により当時の学生をいわばビッグデータのような形で分析する方法はないかと考えております。<sup>(8)</sup>四番目には、集めたことの公開、アーカイブ化を検討しており、何らかの報告をまとめたいと考えております。

以上のようなプロジェクトの内容ですが、聞き取りについては、二〇一三年八月から始めたプロジェクトと一部それ以前に行なったものも合わせ、二〇一六年三月現在でおよそ百件を行いました。聞き取り対象者は、軍隊を経験した慶應義塾の卒業生がわかりやすいのですが、そのみならず学徒動員、あるいは学童疎開を経験した慶應の小学校のOBもいます。またできるだけ多様な方々を掘り起こすという意識の下、戦時期に慶應から学徒出陣してその後は慶應に帰ってこなかったという中退者や遺族、戦死した慶應OBの元婚約者、戦友、近隣住民など、とにかく見つかれば会うという形で「いいとも方式」で聞き取りを収集してきました。また、学部や出身校、軍隊での任地や所属などにも注意を払って多様な人を見つけられました。オーラル・ヒストリーを専門にされる方々からすると、かなり荒っぽい調査とお感じになるかと思います。基本は一回会うだけ、二時間程度という約束です。ただ実際には、それだけで終わることはなく、五時間、六時間、泊まっただけのように言われることも度々ある状況です。私あるいは院生学生らを同伴して音声、ビデオなどに記録する形式でやっています。

方法はともかくとして、「戦争」というテーマが与える警戒や懐疑をどのように回避するのか、あるいは受け止めるのかということには大変苦慮しました。それは大学として行うという公式的な形と、そしてカメラを向けることで会話への影響がどのように現れるのかということでもあります。その点、慶應義塾が行っていることが非常にプラスに作用する面があると感じます。ご存じの方も多いかと思いますが、慶應義塾はOB会の結束が非常に強く、連帯感の中で協力してくれる方を比較的得やすいです。お願いをして拒否されたことはありませんし、カメラを向けることもほとんど拒否されたことはありません。幸いなことに、見た目としてあまり戦争関係のことをやっていそうに見えない、もつとおじいさんが来ると思ったということを毎度言われる、そういう状況や演出も相まって協力を得られているのかと思います。また七十年というタイミングが本人自身に、自分の存在が希少であると自覚を芽生えさせていることを非常に感じます。慶應義塾というつながりの中で何かを規制している部分もある一方、それがプラスに作用し、より多くのことを話してくださる部分もあるかと思えます。慶應義塾が開く扉とその限界といった慶應義塾的な特殊性については、検討の余地があります。

今日、私が中心的に取り上げたい点は、当時の塾長小泉信三をどう評価するかという問題と聞き取り内容との関連性、また収集したモノとの関連性です。小泉信三は明治二十一年（一八八八年）生まれ、昭和四十一年（一九六六年）に亡くなり、二〇一六年でちょうど没後五十年にあたります。在任期間は昭和八年（一九三三年）末から昭和二十二年（一九四七年）の一月までとなります。丸々戦争の時代を経験している塾長で、慶應の戦争の時代は小泉の在任期間と一体であります。

塾長小泉信三の評価をめぐる、小泉がどういう社会的立場にあったかを考えたいと思います。まず学者としては、経済学者としてマルクスの価値論を批判したマルクス主義の痛烈な批判者で、大正時代の河上肇らとの

論争は良く知られていました。また慶應義塾では庭球部長であったことでも知られています。学生時代は庭球部選手として活躍し、その体験を原点に部長として選手を支え、さらに戦時下においてはスポーツに大変理解が深い人だという評価が広くなされています。例えば六大学野球連盟が昭和十八年に政府に解散を迫られたとき、連盟関係者が何とかしてくれと行って相談に行くのは小泉のところでした。さらに慶應義塾においては塾長を務め、戦争をその立場で経験しています。そして戦後は東宮御教育参与として皇太子の教育を担当することになります。戦後皇室の姿を形作る上で非常に大きな影響を与え、特に皇太子ご成婚には大変力があつたといわれます。最後に保守論客としての立場があります。戦後、単独講和論をはじめとして保守の論陣を張ったライターとして知られています。従来のマルクス主義批判の立場からも筆を取りました。

こうした小泉信三の社会的立場が、戦後の社会状況の中でどのようにその評価に影響を与えたかを考えてみます。まず塾長、学校の理事長兼大学学長という立場で、学徒出陣の際も学生を激励して送り出した人物として、戦争責任の問題に舐触するわけです。基本的には本人が全面的に何らかの釈明をするという機会はありませんでした。塾長の退任とともに慶應義塾の教鞭を取る立場からも退きました。そのため、戦争の時代一般を否定的に捉え、マルクス主義の立場からの学術研究も全盛を迎えるという学界の状況も相まって、小泉が批判的に語られることは非常に自然なことであつたと思われれます。特に経済学部の中に小泉信三を非常に否定的に捉える雰囲気が強固に醸成された側面があつたと感じられます。マルクス主義批判の経済学者、そして保守論客という立場での小泉の戦後の活動には、戦後の思想風潮の中で当然反発がありました。また東宮御教育参与という立場に対しては、皇室に関係するということからイデオロギー的に反発する考え方も多く生じたことが推定されます。

小泉のそれぞれの社会的な立場に対する捉え方が、思想風潮の推移に伴って変容する中でも、スポーツの理解者という部分は、最も無難に評価をされ続けていると考えることができそうです。したがって慶應義塾の中では、小泉信三といえば「小泉体育賞」という、体育会の学生が取る一番名誉ある賞に名前が冠されていることだけはよく知られています。「練習は不可能を可能にする」という小泉の言葉も体育会では良く知られています。また、平成以降は皇室の存在や活動を、比較的穏健に受け止める風潮も広まりました。近年は昭和三十年代ブーム、『三丁目の夕日』の流行などもあって、皇太子ご成婚時代を懐かしみ、小泉信三が再び脚光を浴びるという流れも起きています。

このように小泉という一人の人物の社会的な立場が、戦後の思想風潮の変容の中で、様々な評価や語りを生み出します。以下では典型的な小泉評として三つ挙げます。一つ目は作家の堀田善衛で、昭和十七年に慶應を卒業、しかもその父親が小泉信三と同級生という人物です。

「戦時中の小泉さんは本土決戦も辞せずというものすごい主戦論者で、一度、親父が東京で会った時に、『あなたはアメリカの実情を一番よく知っているはずだ。それなのに、なんでそんなバカなことをいつまでもいっているのか』と小泉について、その場で大喧嘩になった」（堀田善衛「私の中の日本人」一九七六年）

堀田は小泉が没して間もなく、慶應の機関誌『塾』に、「小泉氏の真の肖像というものが、必ずしも明らかになっているとは思わないので、あえて書くことにした」として、時勢に迎合した人物として強く非難する一

文を寄せています（「親子三代」一九六八年）。この寄稿が、小泉追悼号から日も浅くして一ページを割いてこの媒体に掲載されていること自体が、当時の学内における小泉評価を示唆しています。次に挙げましたのは、安田武の『学徒出陣』です。小泉信三は信吉という息子を戦争で亡くしていますが、以下のように批判されています。

「多くの塾生が…戦っていた。その戦況について、その前途について一抹の憂慮を覚えるともなく、ただ必勝の信念と敢闘精神に凝り固まっていたとすれば、知識人小泉信三は、知識階級エリットの任務において、その自覚を全く欠いていたということになる。生活者としての特権にたいする無自覚、知識階級としての任務にたいする無自覚、この二重の無自覚の上に、小泉信三の毅然たる信念が築かれていた」（安田武『学徒出陣』一九六七年）

小泉評の三つ目として、その前のものとは逆のことでありますが、戦後すぐの帝国大学新聞を挙げます。

「局外者の我々からみると、戦争中の各大学総長（帝大も含めて）の中では、小泉さんがいちばん立派であったと思われるのだ。形式上の戦責を追求するのもいいが、戦争の波から学園を護り人知れぬ努力も正確に伝えられてよいように思う」（扇谷正造寄稿、『帝国大学新聞』一九四七年二月十九日）

学長の立場である側面では抵抗し、ある側面では協力して、その主眼は学校の存続であり、その苦勞は知ら

れていないという意味であろうと考えられます。このように、小泉に対する評価は様々な背景を持つので、安易にどれかを代表させることはできないという状況にあります。

さて、プロジェクトで集まった一次資料などの中で小泉信三がどう描き出されていたかを見たいと思います。この時代を慶應義塾で過ごした学生の資料には小泉塾長の名前がたくさん出てきます。必ずといっていいほど当時の学生が携えているのが、寄せ書き署名のある日章旗です。ご本人が亡くなられても日の丸だけは捨てずに残してある場合が多く、集められた三十枚ほどの日章旗のほぼすべてにおいて、右端に「征け〇〇君」という小泉信三の署名があります。また、小泉から学生に対する自筆の手紙が送られている例を幾つか確認できています。一つの例では、ある学生（土橋俊一）が学生機関誌に投稿した福沢研究の文章を、非常によいと褒めて、これから頑張りなさいという手紙を出したものが残っています。その学生が額に入れて生涯飾っていたものです。それから、古谷真二という卒業生に対して、特攻出撃直前に送られた手紙も残っています。これは靖国神社に所蔵されています。古谷は遺書を残しておりまして、三島由紀夫がそれを江田島で見、私にはこんな覚悟がないと流して涙を流したという有名な話があります。その古谷が最後のお別れで三田にきたときに偶然小泉塾長に会い、その後小泉塾長が古谷に対し、君の名は絶対忘れないと書き送った手紙が残っています。次に紹介するのは学生の手帳です。塚本太郎という水球部の主将だった学生で、後に人間魚雷「回天」で亡くなるのですが、大和ミュージアムが所蔵しています。心覚えで気になった言葉を書き留めているノートのようですが、丁寧に見ていくと塾長の言葉が書いてあるのがわかります。「自己の所信に忠なれ 表部に従ひ肚にそしるは卑怯の業ぞ 道徳的背骨 福沢先生の官位辞退 夏目ソウ石の博士辞退（塾長）」とあります。これが軍隊時代のものか学生時代のものか、どちらかはつきりしませんが、学生にとって塾長が

どういう存在だったかを側面的に教えてくれます。もう一つご紹介します。江田島の海上自衛隊第1術科学校教育参考館の所蔵資料で、近江一郎という人が収集した特攻戦死者資料の中に慶應出身者の遺書が複数あります。特攻の出撃が決まった熊井常郎という学生が、最後に書いた手紙の中で、急に決まって時間がないのでお礼を言っておくことができない、戦死の公電が入ったら左の人たちに伝えてくださいといったことが書いてあり名前が並んでいます。その最初に「芝区三田慶應義塾内 小泉信三」とあり、その後には伊藤政寛というゼミの先生、一人飛んで石川忠雄と書いてあります。後に塾長となる石川忠雄で、大親友だったようです。断片的ですが、小泉信三に関係する資料の一部をご紹介します。これらの資料が示唆する学生にとつての小泉の存在はどのようなものといえるでしょうか。

次に、これまでの聞き取りの中で小泉信三がどのように語られているかを申し上げます。主に特徴的な言説を挙げます。まず、学生による小泉塾長宅の訪問の話は戦争中も戦後もたくさん出てまいります。戦前から小泉塾長は毎週木曜日に「木曜会」と称して自宅を開放していたことが知られていますが、日常の中に塾長がいたと語られることが非常に多いのです。それから学生の身なりを注意します。「塾長訓示」というものがあるのですが、慶應生たるもの紳士であれ、身なりをしっかりとするようにと小泉塾長は厳しく言っています。直接注意をされたという話も大変多く、例えば帽子が汚い、靴を磨け、マフラーをするな、ポケットに手をつっ込むなど、細かいことを日常的に注意されたという、そういう存在としての塾長が頻繁に顔を出しています。

また戦後の話の中では、塾長が学生に「もしもあなたが戦犯になったならば、私が送り出した人間であるから身代わりになる。そのように法廷で言いなさい」ということを言ったことが、頻繁に出てきます。具体的な話として、昭和二十年九月の卒業式でそう聞いたとおっしゃる方もいます。新聞にそういう話が出ていたとい

う方、友人が訪問して聞いたという方、噂として耳にしたという方もいます。ただ昭和二十年九月、小泉信三は空襲による火傷で入院中、とても出席できる状況になく、聞き取りの危うさという側面でもあるのかと思いますが、複数の語りに登場しますので、何らかの形でこういう噂が確かに存在していたことがわかります。概して、聞き取りを行った方々は、小泉塾長に対して非常に好意的でありました。これは申し上げておきたいと思えます。

このように聞き取りに出てくる小泉信三の姿が、先ほどの様々な資料に現れてくる小泉とどのように結びつき、それが慶應義塾の歴史を位置付けていく中でどのように考慮されるべきか、今悩むところです。

戦後の社会的な評価の変容を見据えながら、小泉信三をどう評価するのか、大きな課題と考えております。私なりにオーラルと一次資料をどう絡み合わせて歴史を記述していくかを考えたときに、やはり学生と塾長の間合いを計る資料として聞き取りと文献資料、双方を見比べていく必要があるだろうと思っています。どちらかが主で、どちらかが補足的なものであるとはなかなか言えないことを、小泉塾長の例から実感しています。小泉の評価が時代的な変容を遂げていること、特に変容しやすい側面を持つ人物であったこと（マルクス主義、皇室との関係等）を見据えた上で、同時代に事実であったことは何なのかを峻別していく必要性を感じると共に、その難しさに直面している状況であります。

ほかにも、小泉塾長が聞き取りの中に表われているという具体例はたくさんあります。非常に肯定的な評価から若干否定的な部分を含む評価まで、まさに多様な小泉信三の受け止め方、語りであります。これを一つの記述にまとめていくときに、どのような考慮や分析が必要なのかという点は、まだ結論が出ておりません。

最後に、戦中戦後の時代は特に文献資料が欠落している時代でもあり、聞き取りとわずかな文献資料を双方

向的、有機的に検討していくことよってのみ論じ得る部分が多分にあるのではないかと思っております。そして、価値観が一層相対化していく戦後史、この後の慶應義塾史、現代史を編纂する上で、その視点は不可欠となるのではないかと感じている次第です。雑駁なお話で恐縮ですが、これで私の報告とさせていただきます。どうも有り難うございました。

## 二 ライフストーリーによる社会学的歴史研究の可能性

蘭 信三

上智大学の蘭と申します。今回主催の一つはJ O H A（日本オーラル・ヒストリー学会、Japan Oral History Association）ですが、私はそこで歴史研究にとつてのオーラル・ヒストリーという課題に重点的に取り組んでおります。と申しますのも、J O H Aの初期メンバーは、女性史や社会史の研究者が中心だったので、社会学の桜井厚さんがこの領域を切り拓いてきましたので、今では歴史学系よりも社会学系の研究者が多くなつてきています。そこでもう一度歴史研究から捉えなおしてみようと、有末会長を中心に学会の共通課題として「歴史研究にとつてのオーラル・ヒストリー」を設定しました。私自身は社会学的視点から歴史的研究をしておりますが、歴史社会学か社会史かについても、定義にこだわらずにやってきました。また、社会学におけるオーラル・ヒストリー研究は、生活史からはじまり、ライフヒストリー、そしてライフストーリーと用語が展開していきます。私はこれまでライフヒストリーという言葉を中心に使っていましたが、今回はあえてライフストーリーという言葉を用いて報告したいと思います。この点はJ O H A全体の問題意識でもあります。自分の共同研究においても、オーラル・ヒストリー、ライフヒストリー、ライフストーリーをどう考え、位置付

けたらいいか、一度正面から議論したいという目的もあります。

私は満洲から引き揚げてきた日本人の研究をしています。<sup>(9)</sup> 私たちの共同研究では少し対象が広がって「帝国と人の移動」をテーマとしております。ここでは聞き取りの位置づけが非常に難しいです。共同研究メンバーは学際的で、歴史学者、社会学者、地理学者、日本語教育と様々な専門の人がおり、人の移動への社会史的研究を共通項としています。私たちはそこで文書資料だけでなく、個人の聞き取りも重視しています。例えば引揚者、在日朝鮮人、七〇年代の社会運動家などに聞き取りをします。私はライフヒストリーの聞き取りをし、別の人はライフストーリーの聞き取りをしますので、最後に研究成果を出すときの調整は苦労します。実名にするか仮名にするかひとつとっても難しく、社会学では仮名にしますが、歴史学では実名にしますが、それぞれに根拠があるのです。社会学では、マイノリティへの聞き取りが多く、彼らは実名が出た途端にさらなる差別を被る可能性があるため実名を出しません。一方、歴史学の場合は再現可能性、資料の信頼性が重要なため、実名を出さなければなりません。本来、歴史学ではデータ作成はせず、現存するデータをもとに研究するものですから、データの客観性や信頼性は非常に重要です。ですから、私が調査した人に対し、次の誰かが調査した場合にも同じ内容が話されるという点が大切なのです。他方で、社会学ではアンケートに代表されますように、研究者が自前でデータをつくります。データ作成過程に研究者がコミットすることは重要です。しかも、桜井さんの「対話的構築主義」に代表されますように、そもそも社会学にとって同じ話が二度聞かれることはないということを前提としています。このような専門が前提とするものの違いで、ぶつかり合うことが度々ありました。

このような苦労をしながらも、これまで方法論的なことにはあまり関心がなく、その場かぎりでの対応

をしてきました。ただ最近、『岩波講座 日本の歴史』に「オーラルヒストリーの展開と課題」を書かせてもらい、方法論を再検討してみました。<sup>(10)</sup> その結果、例えば八〇年代からの言語論的転回、構築主義、冷戦崩壊後の歴史論争に関して詳しく勉強しました。歴史学的オーラル・ヒストリー研究は構築主義と相性が悪かったのですが、社会学的ライフストーリー研究は構築主義と相性がよく、しかも桜井さんという偉い人が深めていったという過程があります。また、歴史家の野家啓一が書いた論文に、歴史には「正面図」と「側面図」があると言いましたが、<sup>(11)</sup> 慶應の浜先生はそれを「正面の歴史」と「側面の歴史」と言い換えました。<sup>(12)</sup> 最近、野上元さんがその議論をもう一度アレンジして書いた論文もあります。私はそれを読んで深く共感し、ライフストーリーを「正面の歴史」、ライフヒストリーを「側面の歴史」として位置付けたいと考えました。ただし、構築主義と実証主義の場合もそうですが、「正面の歴史」と「側面の歴史」は二項対立の関係ですが、それは二者択一とは異なり、図と地がひっくり返る可能性もある。どちらが図でどちらが地なのかは相互に関連しているのではないかと野上論文を踏まえて議論を進めます。<sup>(13)</sup> 「正面の歴史」がライフストーリーで、「側面の歴史」がライフヒストリーです。その両方から、歴史を、社会学のライフストーリー研究をしようとしていることを話します。

ここで、聞き手として、研究者としての自己紹介をいたします。私は一九七九年に大学院に入学しました。当時の所属先の京都大学社会学では理論社会学、学説研究が中心でした。調査やフィールドに行く人は本当に数えるくらいでした。しかし米山俊直先生の研究室には全学から大学院生が集まり、フィールドワークを行なう人が多くいました。そこで私も何となくフィールドワークに惹かれました。大学院の社会学研究室に入りましたが理論社会学についていけない。私は百姓の息子だったこともあり、農村研究ならばできるかという感じ

で、何となく農村調査を始めました。ただし、当時は「代表性」のない聞き取りに対して強い批判があり、「ハイマワリ調査法」だとかいわれて強く批判されました。一九七九年当時、理論社会学、構造機能主義が中心で、しかも調査をするならば実証主義でなければ議論できないという方法論を叩き込まれていました。

しかし一九八一年、中野卓先生が日本社会学会の会長就任演説「個人の社会学的調査研究」を行い、インタビューを与えました<sup>(14)</sup>。八三年、私は同志社大学の松本通晴先生のプロジェクト「都市移住調査」に参加し、そこで生活史、ライフヒストリーをはつきりと意識した聞き取りの訓練を受けました。これが方法論の転換点となりました。そして一九八四年と一九八九年に、満洲移民や中国残留日本人への聞き取りを経験したことが、研究の転換点となりました。松本先生に教えてもらった直後でして、二つのインタビューから衝撃を受けました。それまではオーソドックスな農村調査をしていましたが、そこでライフヒストリーという研究、インタビューを中心とする形に方向転換しました。私は桜井厚さんが理論を完成する以前に教育を受けたので、松本先生の影響や、その前に民俗学的な研究をしていた益田庄三先生の影響も強く受けています。そのためにもライフヒストリーの聞き取りにこだわり、桜井厚さんのライフストーリー研究になかなか入っていきませんでした。

ライフストーリー研究と「言語論的転回」、構築主義について見ていきたいと思います。一九七九年、中野先生や有末先生を中心とした生活史研究会が発足し、日本でライフストーリー研究あるいは生活史研究が急速に展開されます。一九九五年の『ライフヒストリーの社会学』、二〇〇二年の『インタビュ어의社会学』の刊行で、ある段階に到達します<sup>(15)</sup>。言ってみれば、八〇年代、九〇年代の二十年間で日本の社会学ではライフヒストリー研究、ライフストーリー研究が大きく展開しました。私もこの時期に自分の研究を蓄積したのですが、

方法論においては、どちらかというところライフヒストリー的な研究でした。

欧米の歴史学を見ると、六〇年代に社会史研究が始まり、下からの歴史、オーラル・ヒストリーが復権します。欧米の社会学ではグラントセオリー批判が始まり、ミクロソシオロジーが展開され歴史研究も見直されます。その少し後に日本の社会学でも生活史研究、ライフヒストリー研究が展開されました。そもそも、オーラル・ヒストリーでもっとも著名なイギリスのポール・トンプソン (Paul Thompson) が言いますように、第二次世界大戦後、六〇年代から七〇年代にかけてイギリス社会が大きく変化する中において社会史研究は生まれたいえます<sup>(16)</sup>。もう一つ、彼は歴史学者ですが、社会学部に配属されたことからオーラル・ヒストリー研究を展開しました。七〇年代のイギリスで社会学と歴史学の出会いがあって、そこでオーラル・ヒストリーの復権が生じたのです。七〇年代は様々な意味でヨーロッパは変わっていき、アメリカでも社会批判、社会運動が出てきます。その中で政治経済を中心とする歴史から、民衆の歴史や下からの歴史という視点が非常に強くなっていきました。有末先生が、日本の社会史研究の中では慶應が大きな拠点だったとおっしゃいましたが、私もそう思います。ですから、その場所でのようなお話ができるのはとてもうれしいことです。歴史学でも七〇年代、八〇年代、研究に新たな傾向が出てきます。社会学の中でもグラントセオリーが壊れて、ミクロソシオロジーが展開します。桜井さんは主に現象学的社会学をやっていましたが、滋賀の部落調査や琵琶湖環境研究の過程でインタビューを重ね、ライフストーリーという方法を深めたのです。その際、認識論において言語論的転回が生じ、構築主義的な見方が広がっていきます。その動きのなかで若手としていち早くその流れをキャッチし、研究をリードしたのです。同時に聞き取り調査もすすめ、聞き取り実践と方法論のバランスの中で「対話的構築主義」を確立し、ライフストーリー研究へと深化させました。あとで記憶と歴史論争の話をし

ますが、歴史的なオーラル・ヒストリーにおいては、かつて中村政則先生や大門先生が議論されてますが、実証的データとしての確からしさが問題になってきます。一方、構築主義とは何が事実かではなく、それがどう語られるかがポイントなのです。ライフストーリーの場合も、どう語るかがポイントで視点に大きな違いはない。桜井さんが偉いだけでなく、ライフストーリーは構築主義と相性が良いという点からも、方法として大きく展開したと考えています。

記憶と歴史の論争について見ていきます。言語論的転回や構築主義の歴史的背景には歴史の大きな転換も関係したと考えられます。冷戦が終わり、様々な歴史的な事実や記憶が浮かび上がる。一九九一年、韓国人の金学順さんが日本軍「慰安婦」であったとカミングアウトします。冷戦下であれば抑え込まれていた事実や記憶が浮かび上がってきます。それらをどのように見ていくのか、歴史認識論争や歴史家論争が生まれました。今でも論点になりますが、元慰安婦の話について、それを実証主義的なスタンスで聞き取るか、それとも彼女たちの想いを主に聞き取るかで、話の受け止め方が違ってきます。金さんがカミングアウトした後、日本でその点がいぶんと議論されました。たとえば上野・吉見論争が代表的ですが、<sup>(17)</sup>上野千鶴子の視点は社会学的で、金の出現は戦時性暴力に関するパラダイムをシフトし、認識を変えたといえます。従来、戦時性暴力は普通に知られていましたが、金証言がそれを社会問題化させ、戦時性暴力研究が大きく展開したのです。上野は何があったかよりは、何が語られ、語られないかが重要といえますが、桜井さんのライフストーリー研究はもう一歩進んで、それがどのように語られるかを問題にします。そこに社会学のオーラル・ヒストリー、ライフストーリーに対する認識的な問題が扱われます。二人による真正面からの議論はなかったのですが、私はそのように理解しています。

ライフストーリー研究と歴史研究に關してです。歴史学のオーラルヒストリアンが、語りを実証的だと思っ  
ているかといえはそれは違います。政治史研究の伊藤隆や御厨貴は、語りの構築性をはつきりと認めてい  
ます。<sup>(18)</sup>複数の人が一つの出来事に遭遇した場合も、それをどこから見たかという位置取りによって事実を違っ  
て受け止める「羅生門的な事実」を指摘します。例えば、植民地支配に加担した総督府の役人、内務官僚、軍  
人は、戦後社会の価値観の激変によって否定されます。戦前は日本社会の中心でしたが、戦後は日本社会のパ  
ブリックヒストリー、中心的歴史から排除されますが、それに基づき、あるいは対抗して記憶が再解釈されま  
す。社会的な価値観の変化は「社会的文脈」によります。さらに誰が、どう聞くかによって話し方も変わる点  
も、伊藤や御厨は当然ながら共有しています。しかし語りの構築性は共有されながらも、それをめぐってライ  
フストーリー研究と実証主義はスタンスが分かれるという興味深いことがあります。ライフストーリーは徹底  
的に語りを重視して聞き取り、「語りに語らせ」ます。「公人のオーラル・ヒストリー」を中心とする政治史の  
聞き取りでは、基本的に聞き取りは重要であるものの二次的で補完的なものであり、あくまでも史資料が中心  
というスタンスです。そこが両者の間で決定的に異なるのです。もちろん、ポール・トンプソンが言うよう  
に、オーラル・ヒストリーは社会的な研究、下からの研究、下からの歴史、その方法として使われたのであ  
り、総理大臣のような社会的に重要な地位にあった人たちを対象とする「公人のオーラル・ヒストリー」とは  
違います。資料のない民衆を研究対象とする社会史がオーラル・ヒストリーを主要な方法とするのとは事情が  
違うのです。

さて、ここから私の独自の展開になります。桜井さんを中心とするライフストーリー研究では、語られる  
物語は「いま・ここ」で語られる。聞き手と語り手が「いま・ここ」で語り、聞き取るという現在性に大きな

意味があります。過去の出来事を振り返って今語るわけです。それは「正面の歴史」といえます。「正面の歴史」は過去の事実や体験をそのまま語っているわけではない、その意味はとも大きく思います。「あのとき・あそこ」で体験した出来事が通常の歴史なのでしょうが、それがある種の「側面の歴史」と考えられる。

だから「いま・ここ」で語られることと「あのとき・あそこ」の出来事の関係性について、語りの中から緻密に考えていくことはとても大事ではないかと思っています。

話は次の「帝国の狭間で生きる」人びとのライフストーリーに行きます。私は、満洲に行つて帰つてきた人、満洲に行つて戦後も新中国に残つて残留婦人や残留孤児として生きた人たちから聞き取りをしています。聞き取りをし、それを研究し、彼らが生きた歴史を研究すること自体が、社会学の中でも最も歴史研究的な部分かと思えます。既に桜井さんが指摘してますように、個人の語りは勝手に語られるのではなく、社会的文脈の中で語られます。また、先ほど個人の記憶と集団の記憶としましたが、社会の中で語られることはマスター・ナラティヴ、集団の中で語られることはモデル・ストーリーといいますが、個人の語りは、マスター・ナラティヴやモデル・ストーリーと離れて自由に語られるのではなく、それらに規定されます。しかし私は、「規定される語り」と「生み出される語り」の両方を考えています。個人の経験が、マスター・ナラティヴやモデル・ストーリーによつて語られるだけではない。自分の強烈な経験に基づく語りもあります。残留婦人の語りを聞くとマスター・ナラティヴやモデル・ストーリーから距離があることが多い。社会から隔絶した中で生きてきたこともあり、自分の中にある経験に即した想いが強烈に語られることもあります。そのことが私にとってはとても面白いのです。「規定される語り」と「生み出される語り」、さらにマスター・ナラティヴとモデル・ストーリーが絡み合うのです。個人の語りは、単にその人が自分の昔話をするわけではない。この

ように、その語りの構造性が明らかにされてきたのです。私自身の経験でも、一九八〇年代、二〇〇〇年代、二〇一〇年代に聞いた語りは、二十年、三十年たつてくると変化してくる。それは社会的な文脈が変化し本人の置かれた状況も変わるからです。過去の体験は変わらないはずなのですが、語りは変わります。三十年間の語りを継続的に聞く中で変化するものを読み取っていくのです。文脈の変化の中で語りの「側面の歴史」を見渡す。でも「いま・ここ」で語っているときには、「正面の歴史」的な語りをするわけです。そこを突き合わせていくことによって一人の人の語られたライフストーリー、物語化されているのですけれども、そのことに様々なものが含まれていると思います。

結びに、社会学的ライフストーリー研究による歴史研究について、そもそもライフストーリー自体が民衆の生きられた歴史を対象としています。人々の「いま・ここ」で語られる「経験」というのは、「あのとき・あそこ」の「体験」を踏まえています。これは歴史的な「体験」と言い換えてもいいと思いますが、人びとの「生きられた歴史」を「正面の歴史」と「側面の歴史」の双方から迫ることを可能とします。私がとりわけ研究対象とするのは社会的評価です。例えば植民地支配に加担した、植民地に行った、越境した人びとのように、社会的な評価が激変する歴史を生きられた場合は、「経験」と「体験」の差が大きい。ライフストーリー研究による歴史研究の持ち味は、さらに後に社会的な文脈が大きく変わることを用意深く見ていくことではないかと思います。

最後に一言、都倉さんのレジュメを見て思い出しました。私の信三という名前は、実は小泉信三先生の名前にちなんでいると父に聞いています。ここに慶應大学、小泉先生に深く感謝申し上げます。

### 三 オーラル・ヒストリーによる歴史学的歴史研究の可能性

大門正克

大門と申します。蘭さんと私のタイトルが入れ子状態になっています。準備の過程で報告の中身を決めずにタイトルを決め、社会学と歴史学の対話の第一弾の機会にしようとしていました。歴史学的歴史研究という表現は聞きなれないと思いますが、蘭さんのご報告「ライフストーリーによる社会学の歴史研究の可能性」に対し、オーラル・ヒストリーによって歴史学的歴史研究はどのような可能性を持っているのか、私の経験に即して話したいと思います。一九七〇年代末以来、地域で歴史の調査をするたびに人と会い、話を聞いてきました。

一九九七年に私自身の聞き取りに転機が訪れ、聞き取りの方法を再考、反芻し、転機の意味を考える文章も書きました。そこから「聞き手の役割」に気づき、話を聞くことに留意し、聞き取りと歴史叙述を考える中で、二〇〇九年に『戦争と戦後を生きる』<sup>(19)</sup>を執筆しました。その後、改めて自分の聞き取りを振り返る機会を経て、今回はそれに次ぐ機会になります。今まで、私はオーラル・ヒストリーと、文字をベースにした歴史学との関係を考える文章を書いてきました。<sup>(21)</sup>今回、歴史学的歴史研究の可能性を考えるとということで、今日はオーラル・ヒストリーの側からライフヒストリーとの対話、両者の相違点と共通点を考えたいと思います。

私の聞き取り経験に即する形で話をします。一九七八年修士課程での長野県南曇郡温村の農村調査において、手探りで聞き取りを始めました。後で振り返ってみると、歴史研究で地域を対象にするからといって聞き取りをすることは全然メジャーではなく、やっている人はあまりいなかったです。学部と大学院時代の私の先生は、蘭さんのご報告で名前の出ました中村政則さんです。農村調査での中村先生の聞き取りを見て、調査で

はそうするものだと思ひ込み、手ざぐりで聞き取りを始めました。当初は具体的なテーマ、例えば戦前の昭和恐慌期に政府が取り組んだ農村経済更生運動などについて聞くのが私の聞き取りの出発点でしたが、それを少し違う方法に変えていきました。一九八〇年代のころ、一九二〇年代岐阜の農民運動共同調査と、私自身で前の山梨県のある村の農民運動などの調査をしており、そこで聞き取りを加えていました。その中で「コウギロク（講義録）」という言葉に何回か出会いました。当時、私はその言葉を知らず、こちらから聞いていないにもかかわらず、「コウギロク」（通信教育）で勉強したことを熱心に語る人たちがいました。テーマ以外のことで聞くことから話が膨らむのを実感しました。農村での聞き取りは、農業労働と社会的経験の二つの側面から、その人の生い立ちの時間の流れの中でライフヒストリーを再構成できるのではないかと考え、聞き取りはある事柄の補完だけではない可能性を持つと考えました。<sup>(22)</sup>

一九九七年、農民運動にかかわらなかつた女性に話を聞く中で、途中から話をしてくれず、沈黙の中で聞き取りがうまくいかななくなることがありました。農業労働と社会的経験でライフヒストリーを聞く方法で、うまく話が聞けていると思っていたので、ここでの聞き取りの失敗に大きなショックを受けました。聞き取りに向き合えなくなる時間もありました。

二〇〇三年、ある研究会で聞き取りについて報告をしないかと誘われた中で、ようやく聞き取りの失敗を振り返ることになりました。<sup>(23)</sup> その時点で、私が男性で大学教員であることが農家の女性に話を聞くことに影響しているのではないかと考えていました。しかしここで振り返って強く感じたのは、生い立ちごとに年を区切るように、学校、青年団、徴兵検査について聞く方法は、社会的経験や節目のある男性に対して適した方法ではないかということです。結婚後に出産、家事、家の農業に従事した女性に対しては聞く方法として適さなかつ

たのではないか、あるいは娘さんが同席したことも影響したかもしれないなどと、私なりのライフヒストリーの聞き取り方法では話をうまく聞くことができないのではないかと思うようになります。

そこから話に耳を傾け、歴史叙述で応えることを模索するようになります。二〇〇六年には桜井厚さんと同席するシンポジウムがありました。そこで聞き取りそのものや自分自身の聞き取りの仕方を振り返りました。<sup>(24)</sup>ライフヒストリーを聞くという方法は、語り手の人生の基礎的情報を得る上では有用であつても、蘭さんがいったようにモデルストーリーへ誘導し、語り手の話を制約する面があり、そこには限界があると思うようになります。むしろ聞くことにもっと留意すべきであると思うようになり、岩手で新たに女性の聞き取りを始めることになりました。そこでこの後も登場する小原昭さんを何度も訪ね、同じ話でも何度でも聞きました。私の側からテーマを聞く、何か人生の節目のことを質問するよりは、昭さんの話に耳を傾ける、おしゃべりをするような聞き方に変化します。その上で二〇〇九年に『戦争と戦後を生きる』の本を書くわけです。昭さんは戦時中、満州に行っていたのですが、引き揚げ過程でソ連兵による暴行を回避し、汽車を動かしてもらったために「元商売の女性」に頼むという話を聞き取りの中で話されたわけです。ただし、私はその場であまく応答できませんでした。

今、改めて私の聞き取りについて検証してみたいと思います。一つは、先ほど一九九七年に失敗があつたといつたのですが、その中でよみがえってきた声がありました。<sup>(25)</sup>一九八九年、山梨県の落合村農民運動の展開について、海野はる子さんの聞き取りを含めた形で「小作争議の中の娘たち」という論文を書き、それを海野さんに届けました。<sup>(26)</sup>あるとき、海野さんのご自宅の近くまで行ったので寄ったところ、はる子さんの娘さんが出てきて、「母をすいぶんとよく書いてくれましたね」と言われました。この「よく」は褒め言葉ではなくて、

トゲのある言い方でした。私は釈然としない思いを抱き、しばらく考えたのですが、その意味がわからないままに記憶の中に沈殿しました。一九九七年の失敗後、この言葉がよみがえり、あれは一体どういうことだったか、娘さんが言ったことはどういうことだったかと、その声が残響しました。「小作争議の中の娘たち」は、落合村の小作争議に若い女性たちが多く参加するという珍しい例です。村の娘たちの参加について、それまでは男子青年によって働きかけられたという叙述が幾つかあったのに対し、私は海野さんの聞き取りなどから、内的条件もあつたはずだと思い、内的条件を含めて叙述をしました。ただ時間がたつて論文を読み直すと、海野さんのことを何か苦勞を克服し活躍せんとする筆致で私が書いてしまったのではないかと感じました。社会的経験と農業労働の時間の経験に沿って整理するという私が長く携わってきた方法にもとづく叙述から、娘さんはそのニュアンスを感じとつたのではないか。

もう一つの検証として、今回、一九九〇年代にかけての調査ノートやテープが残されていたので、テープを聞き直し、調査ノートも読み返すことをやってみました。一九九七年ぐらいまでは私なりのライフストーリーを聞く方法で聞き取りをしています。テープを聞くと、三〇年前の自分の声がよみがえってきて、興味深い体験をしたのです。当初は農村経済更生運動について、そのテーマに即したことを確かに聞いていました。それが先ほど私が言ったライフストーリーを聞くような方法に変化しているのです。私がライフストーリーを聞いていると思ひ込んでいた時期に全然違う話がされているテープがありました。その一例が一九九〇年、落合村の桜林信義さんという人の聞き取りです。まず調査ノートを見返すとあちこちに話題が散乱し、話にまとまりがない感じがしましたが、実際にテープを聞くと、印象が大きく異なり、語り自体はとてもスムーズだったのです。例えば、戦時中の移動手段としてオート三輪の話が出ると、東京に出て日の丸ストープにつとめたとき

にオート三輪の運転を習ったという話に飛ぶのですが、またその後、日の丸ストーブ後に徴兵検査があったという具合に、話がつながっていきます。四時間ぐらいの話を全体として聞いてみると、あるつながりの中で話されていて、テープの中での話自体に何か違和感を持つものはなかったわけです。

ただし、当時の私はつながりの中で理解するよりは、私なりのライフヒストリーの時間の流れに整理し直して理解をしていたと思います。相手側にはその語りがあり、私はそれを聞いているつもりでも、それよりも私の側にライフヒストリーを聞く方法が非常に強くあって、信義さんなりの語り方や生き方のつながりを、当時はずまくキャッチできていたわけではなかったと感じました。今回聞き直して終わってみると、信義さんの人生をたっぷり聞けたように思えたのです。今の話は二〇一六年のことですが、その前にお話しました聞き取りの失敗後、聞くことへの関心を深め、その先に二〇〇九年の『戦争と戦後を生きる』を書いたことになりました。以下では、これにもとづいて聞き取りを含めた歴史叙述をどうやって私が試みたのかについて話します。

この本では、満州から引き揚げてきた小原昭<sup>てら</sup>さんが「元商売」の女性たちに被害を委譲する話を聞いたことを紹介しています。でも、私はそこで十分に聞くことができなかったと書きました。本が出た後、二人の方から、聞き取り自体に甘さがあるのではないかという批判を受けました。<sup>(27)</sup> それを受けて、確かにそうかもしれないと思いました。当時、小原さんに聞いている中で、私は何よりも私の側から聞くよりは、とにかく耳を傾けて何度でも聞いた話について考えろというスタンスで臨んでいました。小原さんの引き揚げ過程の話についても、耳を傾けることに腐心したのです。

その中で幾つか、今まで感じなかったことを感じました。一つは引き揚げ過程の話のときに小原さんが沈黙し、長い時間、話が止まることがあったのです。以前であれば、この沈黙について留意しなかったと思いま

す。しかし、このときは小原さんの話の内容と沈黙の間に、何か非常に重要な関わりがあるのではないか、あるいはこうした沈黙、表情、身振り手振りを含めて受け止めるところに、対面的オーラル・ヒストリーの特徴があるのではないか、そういうことも感じながら話に耳を傾けていきました。そうすると、小原さんの話は繰り返し返し引き揚げ過程のことに戻るのですが、その話に戻ると必ず、それ以前の満蒙開拓時代の経験のこと、満州経験は戦後になると顧みられず地域で敬遠されたこと、その中で子どももの問いに応えるようにしてようやく体験記を書き始めるように自分で決断したことなど、その時間の中を行き来することを何度も聞くことになります。昭さんにとっての引き揚げ過程には、前後の時期を含めて二重三重の抑圧と封印があり、それを解く上で体験記を書くことに重要な意味があったのではないか、沈黙の重さとは今につづく苦難を表わすのではないか、昭さんは歴史と現在をたえず往還しながら過去を振り返っているのではないか、これらの側面も聞き取りにとって重要なことだと思いました。

歴史の叙述には少なくとも三点の留意が必要だと思います。引き揚げ過程であればそれが引き揚げ過程だけで完結しているわけではないことです。また、聞いたあと、聞き手がそれにどう応え、どう書くか、ためされるのです。さらに、海野はる子さんのような苦労克服物語にしてはいけないということです。

歴史の叙述に向かうという点に入ります。『戦争と戦後を生きる』最終章の内容は、一九五〇年代にあたります。この本の終わりとして、昭さんがどうやって引き揚げ過程を五〇年代に受けとめたのかを考えました。昭さんの聞き取りと五〇年代の地域の関係について調べていくと、一見すると非常に小さな出来事です。が、何人かの女性の中に、戦前の歴史との重要なつながりがあることがよくわかりました。自ら封印をとくためにわずかの時間と飼料用の袋を使い生活記録にとりくむ昭さん、息子ひとりの墓をつくる高橋セキさん、祖

父の強いふるまいを乗り越えて農村女性だけのグループをつくる高橋フサさんというように、彼女たちは戦前とのつながりのなかで五〇年代の生き方を模索していました。彼女たちはそれぞれの決断や取り組みとして、自ら記録にとりくみ、しがらみを断ち、強いふるまいに同調しない新しいつながりをつくろうと考えて行動しています。それは五〇年代なりに被害の委譲を断ち切ろうとする第一歩だったのではないか。私にとつて、五〇年代と引き揚げ過程との関係を叙述することは、昭さんの聞き取りに比べて叙述する重要なポイントでした。もう一つ、この本の冒頭「はじめに」では、小原さんの「声に耳を傾ける」ことで沈黙の意味を含めた叙述をすること、過去は過去だけでなく現在につながることを書きました。「おわりに」では、「沈黙を破る声」として、沈黙をめぐる相互関係の話にふれています。そこでは「相互交渉の過程としての通史」ということも書きました。

「歴史学的歴史研究の可能性」に話を移し、少し提示したいと思います。聞くことについては、社会学と歴史学は基本的に変わりがないと私は思っています。もし違う点があるとすれば、歴史学では歴史過程にこだわるといふ点にあると思います。いうまでもなく時間は単線的な流れの中にあるわけではありません。社会学でも歴史学でも、聞くということは今を生きる人間同士が過去を問うことになります。オーラル・ヒストリーとライフストーリーも、過去と関わる場合には、今を生きる人間同士が過去に向かうことになります。

今を生きる人間が語る過去をどのように位置づけたらいいか、社会学と歴史学ともに困難を抱える問題です。今を生きる人間が聞く限り、構築主義的な側面があることは確かです。しかし、昭さんとの経験からすれば、現在と歴史をくりかえし往還し何度も聞くことは、先ほどの蘭さんの「生み出される語り」にも関係すると思います。

歴史研究の場合、歴史過程を重視すると私は考えます。聞き取りを含めて叙述するとは、語り手と聞き手の相互の関係とその変化に目をとめることです。歴史過程は国家と人びとの相互交渉、人びとのつながりのなかにあります。語り手と聞き手の相互関係を理解する鍵として、先の本で私は「生存」の歴史を設定し、全体史を組み立て直す提案をしています。「生存」をめぐる相互交渉の歴史は、人びとの外に何か全体史がそびえ立つのではないということが大事な点です。人びとにとって欠かせない生きることめぐり、政府と人びとのこともそうですが、いろいろな相互交渉が行われる。外にある文脈でなく、今を生きる人が関わった生存の歴史、相互交渉があります。結果として、歴史のある全体性に通ずるものが考えられます。それが歴史過程を考えるきっかけになるのではないのでしょうか。

終わりに、実証主義と構築主義について述べます。そのことでは蘭さんが松田素二さんのお仕事を援用して書かれています。<sup>(28)</sup> 実証主義と構築主義、実態と表象、事実と構築、いずれも二者択一ではないはずですが、歴史的歴史研究を代表するとは思っておりませんが、蘭さんと私が考えようとしていることにはかなり共通の面がある、二〇〇六年に桜井さんと話をしたときも違いより共通点のほうがあると私は思いました。<sup>(29)</sup>

今日、歴史的歴史研究のことでいうとすれば、一つは歴史過程をどう描いて理解するのか、もう一つは歴史を叙述することに歴史学と社会学の方法で相違があるのかということが議論のポイントになるのではないのでしょうか。これでいったん終わりにします。

#### 四 コメント、リプライ、質疑応答

##### コメント

柳沢遊氏：「オーラル・ヒストリーの歴史と現在」という研究会での討論を回想し、そこから獲得したものを紹介します。この研究会は二〇〇六年度に年十回程度、慶應義塾大学経済学部を教員を中心に、外部からも報告者をむかえて議論され、報告書にまとめられました。<sup>(30)</sup>戦後六十年にあたっていたこの頃、大事なものは歴史における記憶か、記録か、あるいは国民史みたいなものが重要なのかという点が問われていました。例えば「新しい歴史学をつくる会」が一九九五年以降発足し、勢力を増していった時代です。その中で植民地、領土、民族という問題が改めて浮上した状況の中、歴史家としてミクロなヒストリー、構造史や全体史をどう考えるかが問い直されました。総じて経済学の学会では一国史とか民族史に対し、とても批判的な風潮が強かったのです。当時影響が強かったのは、地域間あるいは人的なネットワークに対する関心です。いろいろな議論が入り乱れながら、それまで実証研究をやっていた歴史研究者に対しても、方法論上の問題は否応なしに火の粉のように浴びる時代になっていったのが二〇〇六年でした。私はどちらかというと文献史学の立場ではあるのですが、研究会では矢野久さんがオーラル・ヒストリーに対して手厳しい批判を向け、オーラル・ヒストリーが持つ文献史学との違いについて強調しました。それに対して、清水透さん、鈴木晃仁さんはオーラル・ヒストリーが持つ歴史学や人間の営みを学問化する上での可能性など、方法的な改革の可能性を強調されました。

記憶に鮮やかで、今でも考える問題は第六回研究会、倉敷伸子さんの報告「私の〈聞き取り〉調査体験―二〇〇三年香川県・志度・白鳥地区調査を中心に―」（のちに『年報日本現代史』一二号、現代史料出版、二〇〇七年に所収）です。この報告で「図表」の読み取り、全数的統計調査と一部からおこなったオーラル・ヒストリーの接合について活発な議論が展開し、聞き取りが持つ歴史学の可能性を考えさせられました。<sup>(31)</sup>

そこでは、女性の就業構造、いわば專業農家経営が解体しつつあるときに、ジェンダー規範が直ちに全国的に受け入れられたのではなく、男が働いて女が家庭を守るという意識は、日本の農村地域の多くではむしろ定着せず、逆に新しい自分の労働をやりながら、生産労働や自分の内職などに対して一定の位置付けを与えていく第三の規範が展開しつつあることが示されました。子育て規範を含め、子供のお守をしながらミシンを踏むことの意義です。倉敷さんの結論では、彼女たちの語りは「勘定をくれる」労働への接近が家計維持の手段としてよりも、自分のための行為として意識されたことを示します。志度地域や白鳥地域の「嫁」たちにとつて、賃金収入という選択肢が、直系拡大家族の中で子供、夫、そして自分という関係性をより付加する道を開き、世帯の独立化という「近代化」を專業主婦になることではなく、手袋製造によって収入を得ることで果たそうとしたという問題提起がなされます。単に周りがテレビを買ったから自分も買うのではなく、自分でお金を稼ぐ主体になりたいという気持ちがあるという地域で出てきたと言いたかったのだと思います。

当日の議論ではこの実証研究の結論が掘り下げられるよりは、三人の調査員がどのようにインタビューしたかという点をめぐって活発な議論になりました。当初に設定した二時間面接設問ルールどおりにヒアリングをやってくる人もいれば、三時間、さらに、五時間に及ぶ人もいます。一つの表にまとめられた三人三様の調査

員の結果について議論されました（前掲論文、二三二頁、注（8）参照）。特定の人に対して三人の調査員が行った場合はどうだっただろうかという論点も出ました。インタビューをする側とされる側との関係の難しさは、この研究会で一貫して問題になりました。

大門さんの論点と重なりますが、調査員には当然設問の目的があります。例えば手袋労働を何回やったのか、いつ頃やったのか、そのとき夫は何をしていたかを聞きます。またその人がどういうライフコースの中で手袋労働の時代を迎えているか、何歳のときにやったか、聞きたいから聞くわけです。しかし、答える側は必ずしもそれに直接答えるとは限らない。そのことよりもっと話したいことがある。このあたり、先ほどの蘭さん、大門さん、都倉さんが提起された論点と重なってくる気がします。このとき、私はオーラル・ヒストリーの可能性としての重層性という論点をだしていたようです。要するにオーラル・ヒストリーそのものを大事にするだけではなく、オーラル・ヒストリーの背後にあるその人の客観的なデータ、その人が残した別の史料、その親や周辺が残したもの、友達が言っていたこと、それら全部を明らかにする中で、その人のオーラル・ヒストリーが持つ意味や構造的な位置も分かってくるはずであるということが当時の私の問題意識でした。

倉敷さん自身、聞き取り調査の現場はインタビューをする主体が調査員であるという前提そのものを疑わせるものであったとお答えになっています。そうしますと、オーラル・ヒストリーに至らなかつたものを含め、聞き取りにおける聞く側と聞かれる側の関係性は、現在に至るまで解決を要する問題です。オーラル・ヒストリー、聞き取り、文献調査などをどのようにミックスさせて関連づけるかです。

結論として、オーラル・ヒストリーの歴史実践はまだ端的な段階にとどまり、少なくとも歴史学界全体では市民権を確立していないと思います。今後、「史実を補完する」聞き取りも、文献史学の「見えない領域」

を切り拓くオーラル・ヒストリーも重要だと考えます。そこから文献史学の方に行く人が出てもいいですし、逆に文献史学からは読み取れない個々の人間の歴史にたどり着いて行く方法があってもいいのです。それらを相互に尊重する学風こそが、現代史の研究の裾野を広げるのではないかと考えます。二十一世紀にはいつて、情報伝達手段としてコンピュータの勢いが一層強くなりました。「今と昔の二分法」のような発想で、歴史を日々忘れていかないと生きていけない時間感覚サイクルの中に、現代の若者は置かれています。歴史研究者が育ちにくい社会環境に、少なくとも日本列島がなっているような気がします。

オーラル・ヒストリーの場合、大門さんと「小作争議の中の娘たち」の海野はる子さんとお付き合いのうちに、長い付き合いの中で語りも変化します。自分の中での信頼度、相互の信頼度もまた違ってきます。そうになると、学術論文を書くというサイクルも当然、文献を使ったものとは違ってくるでしょう。そのことに対して文部科学省をはじめ、オーラル・ヒストリー学会以外の歴史学界が、もっと許容しなければいけない。

今日のように、短期的なサイクルでの「成果」が求められ、歴史研究そのものが出版市場レベルでの「消費」の対象となりかねない学問風土にあつては、オーラル・ヒストリーそのものが、一部の学者がやっているような、論文執筆を目的とした短期的な表面的な聞き取りになってしまう可能性もあります。

オーラル・ヒストリー研究者は、この学問の複雑な性格を考慮し、研究成果に産出をさせられない研究態度を保持しなければならないと考えます。その意味では、研究者養成システムそのものを揺るがす「オーラル・ヒストリー」と、それを補完する文献史学、それを許容する学的風土の変革運動が現代の歴史学には必要でしょう。

小林多寿子氏…一橋大学の小林多寿子です。柳沢先生から今、ご自身の研究の立場からオーラル・ヒストリーに関するコメントがありましたので、私はお三方の報告を伺いながら気が付いたことをお伝えする役割だと認識しています。私は社会学が専門で、一九八〇年代からライフヒストリー、ライフストーリーを方法として、あるいはそれ自体を対象として研究を続けてきました。当時から生活史研究会では、社会学とそれ以外の領域から生活史を研究する方が集まっており、ほぼ毎回、中野卓先生が参加されました。九〇年代になって中野先生が中京大学を定年になるときに『ライフヒストリーの社会学』という論文集を出すことになり、そのための研究会を重ね、有末先生共々にその中で書かせて頂きました。最初にライフヒストリー、ライフストーリーに関心を持ったのは一九八一年、国際社会学会のリサーチ・コミッティー・二八「Biography and Society」が立ち上がり、論文集『パイオグラフィと社会』が出版されたときです。フランスの社会学者ダニエル・ベルトール(Daniel Bertaux)が、ヨーロッパおよびアメリカの社会学者の中で質的調査、人のライフを聞き取るというライフストーリー、あるいはライフヒストリー研究に関心を持つ人たちの論文を編集しました。一九九九年から二〇〇〇年、私はベルトールの下で勉強する機会を得ました。帰国した頃、桜井厚さんのLS研というライフストーリー研究会が東京で盛んになり、社会学におけるライフヒストリー、ライフストーリー研究の隆盛期に有末先生共々で研究調査ができたことは本当に幸いでした。二〇〇九年には三田社会学会による慶應義塾創立五十年記念イベントとして「地域研究とオーラル・ヒストリー」というテーマでシンポジウムが開催されました。そこで、沖縄戦体験を語ること、それを記録して証言集にすること、語られたテープをデジタル化して公開するというプロセスを考え報告しました。<sup>(32)</sup>二〇一一年、慶應義塾福沢研究センターが松沢弘陽先生の校注による、『福翁自伝』の分厚い校注の入ったものが出版されたことを記念し、「多角的に読む『福翁自伝』とい

うテーマでシンポジウムを開きました。そこで「『福翁自伝』におけるオーラリティと多声性」という報告をしました。あの時代、テープレコーダーはなかったわけですが、速記によって口述筆記され『福翁自伝』は翁が語ったオーラル・ヒストリーでした。テープがない時代に速記者が速記したのを口述の原稿として福沢に渡し、そこに福沢が手を入れて完成したのが『福翁自伝』でそのオーラリティを考察しました。

社会学からオーラル・ヒストリーを考える人も、私が見るところ歴史学の方々も、まだ十分にオーラリティの部分が考えられていないと思います。先ほどのお三方の報告は、それぞれが自分の長い研究の蓄積の下にお話してくださったのでコメントは難しいのですが、蘭先生からは私と同時代を生きたライフストーリー研究の経緯の説明があり、見事なまとめに感服しました。大門先生からも声とオーラリティについて考えるという提起がありました。オーラル・ヒストリーといったとき、社会学のほうからいえば、語りの生成性のごく思ったのです。おそらく歴史学ではすでにある文書史料を中心に行います。社会学では調査者が調査テーマに従って調査対象のところに引っかけてインタビューをします。あるいはアンケート調査をします。そこからデータを得るといって過程は、当たり前の社会調査のプロセスです。そこで考えないといけないのは、歴史学と違って社会学は生成的データを扱うことです。データには二種類、すでにあるデータと研究者が生み出す生成的データがあります。生成的データには、質的と量的の両方が入ってきます。歴史学から見たときの社会学のデータとして新鮮さがありました。その生成的データを歴史学でどう考えるかといったとき、大門先生の話は歴史学の領域の最先端をいっていると思えました。社会学の「対話的構築主義」のうち、「対話的」とは、データの生成現場をどう考えるか、いかに語られるのかということ。そのことが語られたことにどう影響するのかを真剣に考えます。いろいろな対話の場面を考える社会学研究は様々な影響を取り込みながら進んだ

と思います。生成性をどう考えるか、これからの歴史学、社会学でも大きな課題だと思います。

大門先生の聞き取りにおける失敗談、娘さんの言葉がようやく分かったときの話、ライフヒストリーを聞いたときの苦労や、苦労克服物語として叙述したことの問題、すごく興味深く面白かったです。つまり大門先生が調査者として聞き取り、研究者として解釈したゆえの苦労克服物語です。それを還元しようとしたとき、調査対象者との関係性が生まれることは、生成的データならではのことで。もしすでにあるもの、書かれたものを中心に歴史学研究をもつばら進めていたら、そのことに直面しなかったのではないでしょうか。今後の歴史学でどれだけ展開可能性があるか、社会学から見ていて関心があります。大門先生は歴史学の中ではオーラル・ヒストリーの方法論、認識論を最も深く考えていらつしやる研究者だと私は思います。この問題の提起は、一九八八年に歴史学研究で議論されたときに吉沢南さんが「史料としての体験」を出したときに基づくと思います<sup>(33)</sup>。それから二十八年がたちました。個人の生き方として歴史過程に組み込むという営みをされる大門先生こそが最先端です。後に続く者は大門先生の理論を注視するのかもしれない、私はわくわくしています。

もう一つ、オーラルに語られたものはリテラル、文字にします。社会学でインタビューするときもトランスクリプトを作成します。オーラルのままでは論文にならないし、分析もできない。必ず文字化のプロセスを経るわけで、おそらく歴史学も同じだと思います。オーラルを生かすことに最大限努める場合でも、オーラルからリテラルに変換するというトランスクリプションの問題をどう考えるべきか。口頭で語られる語りがあり、それに手を加え、最後にはどれくらい口述性が残っているかみたいな分析や緻密な研究もあります。私たちはテーマに応じて調査対象のところに行き、話を聞き、ICレコーダーなどに録音し、データとして分析します。語り手に差し戻す場合もあるでしょう。いずれも口頭で語られたものを文字化します。このオーラルから

リテラルへのプロセスをどう考えるべきでしょうか。

もう一つ付随するのは、語られたものをどうするかです。今ではICレコーダーがあり、昔ならオープンリールとか、その頃からテクノロジーの発達で録音できるようになりました。録音されたものは残ります。論文や作品にした後、どこに行くのか、誰のものになるのか。私が沖縄県公文書館で注目したのは、アーカイブ化の可能性があるからです。都倉さんは慶應関係の資料をアーカイブ化されると思いますが、戦争の語りのアーカイブ化の中には保存と公開の問題があるのです。

先ほど蘭先生が社会学では匿名、歴史学では実名という、重要な問題を指摘されました。歴史学でオーラル・ヒストリーというときも、体験者が生きている歴史の中においても近い過去の歴史もあります。本人は生きていなくても、たくさんの人間関係、人に言及されているわけで、それをどう考えたらいいでしょうか。

またデータの根拠について、おそらく文書史料だったら書誌情報を入れてデータを示すことはできても、オーラルリティはその根拠をどう示すことができるのか。社会学も歴史学もオーラル・ヒストリーに取り組みるとき、科学としての検証可能性に直面する問題が出てきます。

私がフランスで学んだベルトーは、「具体的な人間」を研究対象にし、そのためにライフストーリーの方法をとると言っています。ベルトーは、桜井さんの言葉では対話的構築主義というよりは解釈的客観主義の立場に立ち、対象者のライフコースなどを見ながら階層性とかキャリアの問題を考える人です。「具体的な人間」を考える上で、欠かせないのがオーラル・ヒストリー、ライフストーリーだと思います。人間の経験が描かれたものを扱うとき、お三方の報告から触発されて私が申し上げたことは、ディシプリンを超える問題と想っています。

## コメントへのリプライ

大門・柳沢先生、小林先生、有難うございました。ディシプリンを超える問題やライフストーリーとオーラル・ヒストリーの両方に共通する作業に関するご指摘がありました。何度も耳を傾けて聞いたことを考え、繰り返される中で、これらの体験を含めて歴史を叙述しようとする。ここには構築主義の側面もあるのですが、今を生きる人間が過去を聞くことのなかに構築主義を越えるような側面がどこまで見えるか、私は本の中で書こうとしたのです。例えば桜林信義さんのテープについて、聞き手の私が何の解釈も構築もしないことはあり得ません。ただ語り手の議論に即したときに見えてくるものがあります。もう一つ今日言いたかったのは、要するにオーラル・ヒストリーには今を生きる人間が過去を語るという特性があることです。現在と過去を繰り返して横断するように語られ、お互いがそれを意識し、生きている人間同士の関係の中でどのように聞いたのか、そこにオーラル・ヒストリーについて考える重要なポイントがあると思っています。

小林先生の話で、歴史学は常にあるデータで社会学とは違うという話がありましたが、その整理の仕方は歴史学のほうから見れば、かなりナイーブに過ぎると思います。歴史研究は今を生きる人間が過去を問う。私はオーラル・ヒストリーと歴史研究、つまりここでいう文字史料は、同じ課題に直面していると思います。例えば最近の優れた歴史研究で『都市と暴動の民衆史』という作品があります。<sup>(34)</sup>そのルポルタージュをどう読むか、すごく難敵なわけです。そこに書かれている民衆自身が常にある見方の中にしかなく、文字史料が何かすぐ使える形であるわけではないことも含めて考えれば、選択や解釈の問題は常につきまといまいます。同時にそれが今を生きることと関係することを考えると、オーラル・ヒストリーは現代史で体験者がいるからやることで

あつて、昔についてそういうことはできないという見方は成り立たないと思います。オーラル・ヒストリーが直面する課題は、むしろ共通の面もあるのではないかと感じました。

都倉…残された録音の保存と公開の問題ですが、慶應の調査を始めるにあたり、当初はオーラルのことを少し安易に考えていた側面があります。例えばNHK「戦争証言アーカイブス」の担当者に確認したところ、彼らは聞き取りとは別に、改めて映像を収録していて、その後はお金をかけてテキストと画をチェックする中で公開に至るとのことです。こちらは、少ない人手で、間もなく関係者がいなくなってしまうという危機意識のもとで、まず集めたというのが実情ですので、保存、公開については本当に時間をかけて検討しなければいけないと思います。プロジェクトでの聞き取りはすでに百人ぐらいと申し上げましたが、何ってから二、三週間後に亡くなった方もいらっしゃいますし、先週は何たら喪服の方々が出てきて昨日亡くなりましたということもありました。その点では時間との勝負で、公開のリスクと保存の方法は、時間をかけざるを得ないと思っています。

蘭…柳沢先生が言われたことで、ワンショットサーベイのように一回の聞き取りで解釈することもあります。が、同じ人に何回も聞き取ることもあれば、同じようなカテゴリーのいろいろな人に聞くこともあります。私も長い付き合いをする人がいますが、それでも相手の語った内容をどこまで理解できるか、結構難しいと常々感じます。ある種の目的で聞き取りをすると、他を聞けないことはよくあります。社会学といったら、社会調査のテクニクに関すること、定量的な質問に関することなど、それなりに経験を積まないとだめです。オーラル・ヒストリーの場合でも、語り手が語ったことをどう受け取ることができるか、難しいと思います。私自身、大きなストーリーをつかむのは上手でも、小さな語りを聞き取っていくことは苦手だと思っています。具

体的に何が足りないからうまく聞き取れないか、そこは一種のセンチビティになってくるのです。何を見つめ得るか、スタンスを理解できるか、何をどうインタビューできるか、質問できるかという部分になりま  
す。柳沢さんが長い付き合いの中での変化に注目しますが、私はまさにそのことに気をつけています。例  
えば、裁判が起きる前、渦中、終わった後では、内的変化がよく見られます。社会的な価値観や評価が変わる場  
合にも語りは変わります。

有末・今、論点になっていることを確認します。オーラリテイ、オーラル・ヒストリーの口述性という問題の  
議論が多く出ています。小林さんの言葉では語りの生成性ですが、つくられていくこと自体、大門先生によれ  
ば、文書史料における選択や解釈と同じことで、オーラリテイと歴史の文書史料でそこまで違いを感じる必要  
はないという部分も出ています。例えば川田順造先生の文字を持たない文化人類学、フオークローなどもそう  
ですが、オーラルというのは未開民族などに関する口承伝承を大事にするところがあります。一方、社会学、  
歴史学、近現代史で扱う民衆は、リテラシーを持つていることが多いのです。以前、桜井さんが見た被差別部  
落のおばあさんも、読み書きができなかったことにポイントがあります。ただ、そうした人とはめつたに会う  
ことがなく、われわれはどこへ行っても文字を読み書きできる人から話を聞いています。そうすると、口述さ  
れる内容を書いたものがむしろ多い。中野卓先生の『口述の生活史』に出てくる松代さんは、手紙で重要なこ  
とを書いた<sup>(35)</sup>。それが記憶の中にあります。オーラリテイとリテラシーの問題は、研究者側だけでなく対象者側  
も見ていく必要があります。柳沢さんがおっしゃったように、それがオーラルの背後にある資料を探し出すこ  
ともつながると思います。

それからオーラル・ヒストリーとジェンダーの問題、両者は非常につながりがあるだろうと思います。大門

先生からはうまく聞き取れなかったという話がありました。女性に対して男性が聞き手となる難しさがあります。また柳沢さんのお話に出てきた女性の主体化というテーマは、むしろ社会学に多く、ジェンダー研究者はたくさんいます。ここでは女性がその主体性をどう紡いでいったかを出したいのです。女性にとって語ることはいわゆる正史というか、書かれたものの中に登場してこないから語るのだという意識が強いのです。

### 質疑応答

質問1…インタビューをする場所やその特性をお教えください。

蘭…場所による規定はあると思いますが、私の経験ではそこまでありません。国内ではご自宅にお邪魔し、それが一番いいと思っています。それができないときは、公民館や市役所で聞くようなことがあります。国内ではほとんどテープをとって聞いています。場所の問題がある一方で、言語の問題は大きなポイントです。開拓団の人と跡地がある中国に行き、彼らがセンチメンタルになっているときにインタビューしたことがあります。一九九六年に初めて中国に行って開拓団の人たちと一緒に五十人ぐらいで行ったのです。そのときに黙とうをささげた後に、ポツリポツリと話を聞きました。そして日本に帰ってきてから本格的に話を聞いてきました。『中国残留孤児』の社会学』という本を出した張嵐さんの聞き取りでは、中国で中国語で聞き取った場合と、日本で日本語あるいは中国語で聞き取った場合とは、変化が微妙に出てくると言います。ただ、これには彼女自身の歴史観もある。例えば満蒙開拓とか残留孤児に関して、日本人、特に私の世代の日本人に関して、ある種の贖罪意識がある。だからどうしても残留孤児で捨てられた人たち、あるいは開拓団は植民地支配や侵略者であるとか、大きな歴史的なストーリーから自分が抜けて話を聞くのは難しいということです。ど

うしても文脈の中で話を聞いてしまうのです。しかし、私より少し若い中国人の研究者は、逆に侵略を受けた側、偽満としての満洲国の文脈があって、歴史的な文脈から聞き取りが規定される部分が強い。読むものはほとんどみんなそれがわかってしまうという感じです。張嵐さんの場合、不思議とそういった歴史的な規定性があまり出てこない。彼女の意識が非常に高く、ポジティブで複数のアイデンティティがある。残留孤児や二世の人たちの中にそういうものが含まれるのか、彼女はあまりネガティブな聞き取りがないように思える。それはポジショナリティというか、歴史観的なものとも生き方とも関わってくるのです。柳沢先生と私の歴史観は、三歳しか離れていないのですが、満洲国に対するポジショナリティは違っているという感覚があります。そのときにどう聞き取るのかということは微妙に難しいところがあります。私の経験では場所によって規定されることはそこまでのことではありません。

大門…どこかを一緒に旅しながら聞いたという体験はないのですが、思い出すのは、山梨に生まれ育ち、川越の製糸工場で長く働いた海野はる子さんに対し、一緒に川越に行つて話を聞いたことです。そこで記憶が呼び覚まされることはあったようで、そこに来たからこの話をしてくれたのではないかと思つたこともあります。どこかに行つて聞いた体験は多くないです。普段は自宅や公民館で、一人で相手に聞くことが多いです。

都倉…私は大学との関係で聞き取りをしていることもあり、場所はかなり影響していると感じています。当初、元気な方にはできるだけキャンパスに来てもらつて話を伺うことが多かったです。キャンパスで話を聞くわけで、記憶を想起する意味でプラスになると思つたのですが、むしろ逆で、大学に呼ばれることで緊張つてしまいます。スーツを着てチーフを差していらつしゃって、ぎこちない形で終わったことは何度もありました。それから、できるだけ自宅に伺うようにしています。あと、聞き取りのとき、私たちの服装にはかなり

意識をしています。大学の調査と伝えていきますから、スーツを着てネクタイを締めて来ることを向こうは想定されていると思うのですが、できるだけラフな服装で行きます。そして、できるだけ早い段階でどれだけ相手のことを知っているかを示唆します。それでも聞き取りの場に奥さま、息子さん、娘さんが同席される場合、話がかなり変わってきます。軍隊時代のことは当然ですが、例えば学生時代の交友関係の話は、おうちの方が同席されると遠慮し、意識していることを非常に実感します。場所と雰囲気のこととはかなり意識して調査を進めております。

柳沢…場所の問題ですが、一九九七年から一九九八年にかけて一年半ぐらいお付き合いした大連の日本人商人の娘や息子のインタビューで、同窓会メンバー六、七人が年に一、二度、新橋の中華料理屋で集まる場と呼ばれたことがありました。<sup>(36)</sup> 私ははじめ黙って聞いていましたが、食間のときに質問すると、一人が答えてそうだよねと、連鎖的にほかの方もその話題になっていきました。そういう話になるとお互いに自分の思い出がよみがえるようで、場所の問題と少し関わるかもしれません。やはり複数の同時代経験者のいるところで聞くと話も弾んで、私が聞かなくてもどんどんつながっていく、そういう経験は三回ぐらい同席して感じたことがあります。話のボールがどこへ行くかに対してはあまり統制しないで、むしろここは同窓会なのだからしっかり聞こうという感じで、後でそれを振り返ってみると、結果的には私から見えて意味の深い話をなさっていたということです。

小林…記憶の喚起というか、手がかりになることが場所と密接に絡むテーマであれば、場所は重要だと思えます。同時に、物を介在することの重要性もあって、日記や写真など、自分の体験の中で紡ぎ出されたアイテムを持つことによって記憶が喚起され、語りが豊かになるという経験は何回かしました。すでに出ましたが、語

りの場で誰が聞き手なのか、誰が同席しているか、語られた内容がどう受け止められたか、語りの生成の場は非常に重要だと思います。

質問2…沈黙の音を聞き取るなどストイックでないと、根本的な問題提起ができないのではないのでしょうか。大門…今の私は、信義さんなりの語り方には、信義さんなりの生き方が反映しているのではないかと思っています。昭さんの場合も、繰り返し語っていくことを私が何度か聞くうちに、それが昭さんなりの語りの処理の仕方もしれないとか、単に処理の仕方というだけではなく、開拓時代のいくつかの時代をつなげるように、関連づけるように理解をしてきた、あるいはそのように生きてきたなかでの言葉なのではないかと、私にはだんだん聞こえてきたわけです。今の私からすれば、そういうつながりこそがすごく大事な点なのではないかと思っています。その人なりの生き方と何か関わってくることなのです。

質問3…聞き取りにおいて、文献史料などによって語り手の記憶をできる限り引き出すといったことについては、聞き手と語り手が「共犯関係」で歴史を生み出していることになるのでしょうか。

蘭…聞き取りは、聞き手の存在がないと生じない。ではその聞き手は何によってもたらされているかといえ、それは社会的関心です。関心が生じないと聞き手は出てこない。聞き手が出てくることで語り手は語るのです。そのため、オーラル・ヒストリーは全て語り手と聞き手のある種の「共犯関係」だと思います。研究者が史資料を生成するプロセスにタッチすることはもちろんですが、そのような史資料の客観性や信頼性に注意しすぎて、そのような資料の有効性について議論することに歴史学は禁欲的なのかなと思います。

語り手が主体で、聞き手は受け手ということではありません。「アクティブ・インタビュー」という用語がありますように、むしろ聞き手の問題関心の中でどうアクティブに質問するか、ということが大事だと思えます。中には、聞き手と語り手のどちらが話をしているのか分からないこともあります。ある種、聞き手が語り手になり代わって話をしているのかという雰囲気を出すこともありますね。関心を持った人間が存在しないと語りは生じません。しかも、聞き手の歴史認識によって、語りの内容も変わりうるわけです。聞き取りの場において、どのような質問をするかです。聞き取りは長い時間をかけてやることで一つの成果になる場合が多いですが、その一方で一期一会の聞き取りもあります。そのときにどれだけ聞き取れるか、相手の語りが理解できているか。一発勝負になるのであれば、聞き手の存在だけでなく、語り手の存在によっても語りは規定されることになる。だからこそある種の「共犯関係」にあるといえるのではないのでしょうか。

有末・社会学の研究では、調査者自身が経験したことや持っている病気について、当事者としてインタビューをするケースも結構多いです。そのことに関して、当事者である自分はよく知っている一方、それを相手に聞くとき、自分が思っていたこととは全く違う答えをする場合もあります。違った答えの方をむしろちゃんと調査しなければいけないと思います。私は自分自身が自死遺族という立場で、自死遺族の人のインタビューをしようとしたのですが、気持ちがよく分かるがゆえに、あまりいい調査ができないということがあります。分からないからこそ、聞くことでだんだん面白くなるという部分もあるのです。自分が同じ体験をしていると、「ああ、そうだよね」「よく分かる」「言わないほうがいいよ、それは」となってしまうことがあります。これは歴史研究とは違うかもしれません、調査の共犯性という問題にはいろいろな面があるような気がします。

質問4…社会学と歴史学、オーラル・ヒストリーとライフヒストリーの相違点をどのように考えていますか。大門…歴史学では最終的に過去の全体性を描こうとします。そこに聞き取りを含めると、今を生きる人間とその話が入ることになり、より複雑になります。社会学から見れば、そんな最終目標が実現可能なかと思うのではないかと思うわけですが、今を生きる人間が過去を探求し、問うて歴史の全体性を叙述しようとすることは歴史学の宿命です。それは簡単なことではないですが、文字史料を使っても聞き取りを使っても同じことだと思っています。

蘭…社会学は、大門さんの言葉を引用すると、今を生きる人びとが今を語ります。また社会学では現代社会をどう見るか、従来は人類学と違い、自分の国を対象にその社会構造や社会変動を研究してきました。ただ、今を研究する社会学でも、過去の経験を取り取ります。歴史社会学というジャンルです。小林さんと野上さんが編集した『歴史と向きあう社会学』という本がありますが、そこでも歴史的なものをどう捉えるかは定まっています。ただ、生活史、ライフヒストリー、ライフストーリーに関しては、はっきりと視点が定まっていると思います。例えば、「正面の歴史」と「側面の歴史」といいますが、ライフストーリーは今から見ての過去です。過去をどう想起し、語るか。それを聞き取りして、私たちがどのように描くかということになるのです。それは今という時代に規定されており、現代にとつての評価が見え隠れしてくるのです。今という時代から読み取られる過去であるということです。それ自体が社会学の問題であり、歴史とはそういうものだともいわれます。歴史学も社会学も動いています。その中にオーラル・ヒストリーがあります。私はライフストーリーという言い方をしましたが、聞き取り、オーラル・ヒストリー、ライフヒストリー、ライフストーリーに大きな違いはなく、重なり合っています。社会学はこうだとか、歴史学から見たらこうだとかいえる状

況ではないと理解しています。

質問5…女性として男性への聞きづらさを痛切に感じたことはありますか。

小林…私が女性研究者であるがゆえにインタビュで何か困難があったかというご質問ですが、すぐに思い浮かばないです。私が感知する能力を持っていなかったのかもかもしれません。昔、自分史のインタビュに行ったとき、七十代、八十代の男性が多かったです。先ほど都倉さんから「こんな若いの？」と言われたという話がありました。私が大学院生から三十代ぐらいにかけてインタビュに行ったときには「こんな若い人がライフヒストリーを聞くの」というリアクションを受けたことはありました。人生を語ることはある程度の年を重ねてからという思いが共有されていると感じました。ただ周りの研究者から、テーマによって、巻き込まれたとか、調査研究を終える難しさを感じたとか、単なるジェンダーだけの問題ではない、研究者として調査を実践する過程の中での困難などについて様々なことを聞きます。ときには根底にジェンダーの問題があるのかもしれません。ただ長く続けてくると、時代による変化はすごく感じます。八十年代、今から考えたらハラスメント的な発言だと思えば、それを男性の対象者から投げかけられたことはあります。私の場合、それによって調査に支障が出たことはないですが、いろいろな女性研究者にもおたずねになってみてください。

質問6…聞き取りでは同性への語りにくさもありますか。性別の問題を超える可能性を教えてください。

有末…聞き取りにおけるジェンダー問題は、同性とはうまくいく、異性とはうまくいかないということではなく、あくまで相互作用の中で関係します。例えば、女性史について男性だからこそ聞けるといいう話もありま

す。ケン・プラマー (Ken Plamer) とどう、エセックス大学でトンプソンとともにライフストーリー研究をする人は同性愛者ですが、同性と異性に対する接し方はいずれも非常に巧みです。ジェンダー、セクシャリティは相性とも関係があります。私が最近書いた『集合的記憶と個人的記憶』も読んでいただければ幸いです。<sup>(37)</sup>

今日の議論、歴史学と社会学の違いについては、歴史学のことと述べられてきたことの「歴史」という部分を「社会」に置き換えれば、まさに社会学のことを言い表すこととなります。例えば、歴史学で「歴史」過程を見るならば、社会学では「社会」過程を見ます。社会学では、個人と「社会」の相互関係を考察し、「社会」全体でどうかを問います。これも「社会」という言葉を「歴史」に入れ替えれば、歴史学のことを表します。

日本の生活史、ライフヒストリーの初期には中野卓先生が『口述の生活史』を出されました。それ以前はトーマスとズナニエツキ (William Isaac Thomas & Florian Znaniecki) の『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』がありました。当初の生活史は一般的にルポルタージュなどで扱われることが多かったです。すごく個人的な人について、その生い立ちや生活史はどうかという点から読まれていました。こんな人がいいとか、こんな素晴らしい人がいるというのも多かった。ライフヒストリーについては、移民の生活史をはじめ、ここにいる皆さんでやりだしてから三十年ぐらいが経ちました。この間に学術的な蓄積と整備が非常に進んだと私は思っています。今ではナラティブは類型化され、論点の中には、本当にその人の言いたかったことか、社会や時代の影響はどれだけ入っているか、沈黙の意味は何なのかなどがあります。エスノメソドロジーではスク립トにする際に沈黙の秒数まで計測します。

それでもまだ問題はあり、史学との関係もその一つです。先ほど出たように、社会学で史料批判は十分になされていません。歴史学では史料を学問的に位置付けて研究者が納得するまで史料批判を積むことが当たり前

で、社会学でも取り入れるべきことです。ほかにアーカイブ化の課題もありますが、ずいぶん発展しました。私はこの三月で慶應を去ることになりますが、お世話になり、今まで自分がやってきたことを含め、皆さんと共有したいという気持ちです。オーラル・ヒストリー、ライブヒストリーなどの研究が蓄積され、一般化されてきたことを強く思います。これからは若い方がいろいろな手法を使って、それをデータとして見るだけではなく、その生成過程も模索すると思います。私は歴史だけに限らず、もっといろいろな領域でオーラル・ヒストリー、生活史、ライフストーリーなどを使ってやっていただくことが何より一番嬉しいし、いいことだと思っています。ぜひ続けてほしいと思います。

注

- (1) 本稿は、シンポジウム「歴史と記憶とオーラル・ヒストリー」の内容に補訂などを施し、一部を要約し、注を付したものである。『近代日本研究』には福沢諭吉や慶應義塾を視野に置いた近代日本研究の学術雑誌としての性格があり、本稿では当日の進行順序を一部入れ替えて、「戦争と慶應義塾」をめぐるオーラル・ヒストリー「記憶とモノを如何に繋ぐか」(都倉武之)の講演内容を冒頭に掲載していることを記す。
- (2) 都倉武之「松沢弘陽氏基調講演『福翁自伝』校注をめぐる」『福沢研究センター通信』第十六号、慶應義塾福沢研究センター、二〇一二年三月、二二頁。
- (3) 都倉武之「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト始動」『福沢研究センター通信』第十九号、慶應義塾福沢研究センター、二〇一三年十二月、一頁・九頁。
- (4) 都倉武之「『残す』という営為の想起——『慶應義塾と戦争Ⅱ 残されたモノ、ことは、人々』展示報告——」慶應義塾福沢研究センター、二〇一五年三月、三頁以下。同「『慶應義塾と戦争』アーカイブ・プロジェクト活動報告」

- 『福沢研究センター通信』第二十四号、慶應義塾福沢研究センター、二〇一六年四月、七頁。
- (5) 慶應義塾大学経済学部白井厚ゼミナール『共同研究 太平洋戦争と慶應義塾』慶應義塾大学出版会、一九九九年。
- (6) 白井厚編『アジア太平洋戦争における慶應義塾関係戦没者名簿（慶應義塾福沢研究センター資料一）』慶應義塾福沢研究センター、二〇〇七年。
- (7) 白井厚・浅羽久美子・翠川紀子編『証言 太平洋戦争下の慶應義塾』慶應義塾大学出版会、二〇〇三年。
- (8) 平山勉・横山寛『慶應義塾と戦争』アーカイブ・プロジェクト活動報告』『福沢研究センター通信』第二号、慶應義塾福沢研究センター、二〇一四年九月、九頁。
- (9) 蘭信三「中国「残留」日本人の記憶の語り——語りの変化と「語り」の磁場」をめぐって』山本有造編『満洲記憶と歴史』京都大学学術出版会、二〇〇七年。同「戦後日本社会と満洲移民体験の語りつぎ」浜日出夫編『戦後日本における市民意識の形成戦争体験の世代間継承』慶應義塾大学出版会、二〇〇八年。同「満洲引揚者のライフヒストリー研究の可能性——歴史実践としての『下伊那のなかの満洲』」福間良明ほか編『戦争社会学の構想制度・体験・メディア』勉誠出版、二〇一三年。
- (10) 蘭信三「オーラルヒストリーの展開と課題」『岩波講座 日本の歴史 第二十一巻』岩波書店、二〇一五年、二〇九頁—二四二頁。
- (11) 野家啓一『物語の哲学』岩波書店、二〇〇五年、一二五頁—一三七頁参照。
- (12) 浜日出夫「歴史と記憶」長谷川公一ほか『社会学』有斐閣、二〇〇八年、一七二頁—一九九頁。
- (13) 野上元「社会学が歴史と向き合うために——歴史資料・歴史表象・歴史的経験」野上・小林多寿子編著『歴史と向きあう社会学資料・表象・経験』ミネルヴァ書房、二〇一五年、一頁—二二頁。
- (14) 中野卓「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』第三十二巻第一号、一九八一年、二二頁—二二頁。
- (15) 中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂、一九九五年。桜井厚『インタビューの社会学——ライフ

- ストーリーの聞き方』せりか書房、二〇〇二年。
- (16) ポール・トンプソン『記憶から歴史へ——オーラル・ヒストリーの世界』酒井順子訳、青木書店、二〇〇二年（二〇〇〇年の第三版にもとづく翻訳書）。
- (17) 上野千鶴子『ナシヨナリズムとジェンダー』青土社、一九九八年。吉見俊哉『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院、二〇〇三年など参照。
- (18) 伊藤隆「歴史研究とオーラルヒストリー」法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房、二〇〇九年。御厨貴「オーラル・ヒストリー——現代史のための口述記録」中公新書、二〇〇二年。
- (19) 大門正克『全集日本の歴史 第十五巻 戦争と戦後を生きる——一九三〇年代から一九五五年』小学館、二〇〇九年。
- (20) 大門正克「人に話を聞くとということとは、どういふことなのだろうか——歴史学における現場から」『現代民俗学研究』第四号、二〇一二年、一頁—八頁。同「あらためて「聞く」といふこと——ask と listen のあいだ」『日本オーラル・ヒストリー研究』第一〇号、二〇一四年、四七頁—五二頁。
- (21) 大門正克「オーラル・ヒストリーの実践と同時代史研究への挑戦——吉沢南の仕事を手がかりに」法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』第五八九号、二〇〇七年、一頁—一六頁。
- (22) 聞き取りをふまえたその頃の研究成果として、大門正克『明治・大正の農村』岩波書店、一九九二年。同『近代日本と農村社会』日本経済評論社、一九九四年。
- (23) 大門正克「聞こえてきた声、そして『聞きえなかつた声』——ある農村女性の聞き取りから」『歴史評論』第六四八号、二〇〇四年、一八頁—三〇頁。
- (24) 大門正克「歴史学からの接近、歴史学への接近」『歴史学研究』第八一一号、二〇〇六年。
- (25) 大門正克「聞き取りの苦い経験と可能性」『下伊那のなかの満州 別冊記録集』満蒙開拓を語りつくす会、二〇一二年。
- (26) 大門正克「小作争議のなかの娘たち」『歴史評論』第四六七号、一九八九年、四五頁—六三頁。

- (27) 倉地克直「江戸時代史からの感想二、三」『岡山地方史研究』第百二十号、二〇一〇年。高嶋信「大門正克著『戦争と戦後を生きる』を読んで」政治経済研究所『政経研究時報』第十四卷一号、二〇一〇年。
- (28) 注(10) 蘭文献。
- (29) 注(24) 大門文献。
- (30) 松村高夫・清水透・矢野久・倉沢愛子・鈴木晃仁・飯田恭・柳沢遊・崔在東編著『オーラルヒストリーの現在と課題』二〇〇七年(私家版)。
- (31) 倉敷伸子「近代家族規範受容の重層性」『年報・日本現代史(現代歴史学とナショナリズム)』第十二号、現代史料出版、二〇〇七年、二〇一頁―二三五頁。
- (32) 小林多寿子「オーラルヒストリーと地域における個人の(歴史化)——沖繩戦体験を語る声と沖繩県米須の場合——」『三田社会学』通巻第十五号、三田社会学会、二〇一〇年七月、三頁―一九頁。
- (33) 歴史学研究会編『座談会』歴史研究の方法と聞き取りの方法』『オーラル・ヒストリーと体験史——本多勝一の仕事をめぐって』一九八八年、青木書店、一六頁―二二頁など参照。
- (34) 藤野裕子『都市と暴動と民衆史——東京・一九〇五―一九三三年』有志舎、二〇一五年。
- (35) 中野卓編『口述の生活史』御茶ノ水書房、一九七七年。
- (36) 柳沢遊『日本人の植民地経験——大連日本人商工業者の歴史——』青木書店、一九九九年。
- (37) 有末賢「集合的記憶と個人的記憶——記憶の共有性と忘却性をめぐって——」『法学研究』第八十九卷二号、慶應義塾大学法学研究会、二〇一六年二月、一九頁―四〇頁。